
トランスマイクリエーション

Rinn5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トランスマイクレーション

【Nコード】

N9624X

【作者名】

Rinn5

【あらすじ】

ただの高校生だったはずの俺、神坂優斗^{かみさか ゆうと}は、最近世間を騒がせていた通り魔に襲われかけた幼馴染を庇い助けた。そこで終わってればいいものの、俺は逃げ出した犯人を捕まえようと躍起になって、後先考えず道路に飛び出してしまいトラックにひかれてしまった。ああ、儚き人生。しかし、物語はまだ終わらない。気づけば俺はなぜだかまだ生きており、そして、目の前には武装した謎の集団がいた。さらに、わけもわからず謎の集団に襲いかかれ二度目の死を覚悟したその時――

行き当たりばったりの主人公がファンタジー世界で奮闘していく物語です。

ブログ（前書き）

初投稿です。

内容も更新もかなりのスローペースになりますが、頑張っていく
と思っています。

駄文ですが、暇つぶしに読んでやってください。

ブローグ

刃、刃、刃、刃。

それは物を切るもの、あるいは人を斬るために存在するもの。

常日頃平和的に毎日を過ごしていれば見る機会すらほとんど無いそんなもの。

事実ただの高校生である俺は、料理をするときでさえ包丁をにぎればビビって手が震える。

そんな非日常の塊が今、俺の命を刈り取らんとしてこちらに向かってきている。

鈍色に光るそれは、ところどころに赤い液体がついていてこれまでもたくさんの命が刈り取られてきたってことがわかった。

そして、当然ただの高校たる俺は突発的なそれを回避できるはずもなくぶざまに切り刻まれていく。

右足、右腕、腹、そして首筋。

順に切られた部分からせき止めていたダムの水が決壊し、そのあふれんばかりの容量をもってして水撃に変わるように血が噴き出した。

ああ、ちくしょうめっちゃめっちゃいてえ。

何だかよくわからない何にたいしてかさえわからない後悔と理不尽なことにたいする怒りが痛みによる叫び声とともにいまにも爆発しそうだ。

現に俺は、情けない姿だけは曝すまいと唇を血がでるまで噛み締め俺を切った相手を睨み付けようとしているが、その目からは涙がとめどなくあふれ出てきてろくに相手の顔も見えちゃいない。

顔はもう涙だか涎かわからないものでぐちゃぐちゃだ。体も血だか汗だかわからない液体でベトベトして気持ち悪い。

心拍数が上がって体が火照るように暑い気がするのに、背筋から冷氣のようなものが駆け巡る感じがした。

ああ、また死ぬのか。

諦めにも見える薄い笑みがこぼれる。

人は、死ぬとき走馬灯のように過去を振り返るって言う

がありや嘘だな。少なくとも俺にはそれは当てはまらなかったようだ。

何より今もおどろかして生き残れないかと心に反して動く目が、体が、そうさせてくれない。

通常では考えられないぐらいの情報が頭をパンクさせようとするがごとくぶち込まれ、そのせいか頭痛がする。

案外こっちの頭痛の方が体中の傷よりも痛いかもしれない。

しかし、その痛みも次第に感じなくなっていく。頭の中に靄が、かかるかのように、意識がとうのいていく。

そして……俺は、薄れゆく意識の中それに気づいた。

秘密の花園に咲く薔薇のように濃くそして鮮やかな血し
ぶきが舞い散るこの混沌のなかで。——天使を見つけてしまった。

第一話 日常はストーカーと共に

成績、運動神経ともに普通……あ、いや足だけは少し速いか。

そして、学校および私生活での問題は一切なし、髪も目も目立ちたくないという理由で、今まで一度も染めたこともなければ、カラーコンタクトなんぞを手にとったこともない。

髪の手入れさえふだんあまりしないのでいつもぼさぼさだ。

容姿は……容姿は、普通である……と、おもつ。

と、とにかく、そんな平々凡々な17歳、神坂優斗かみさが ゆうとには、ある悩み事がある。

「——でね、あまりにもしつこかったから蹴り飛ばしてやったんだ。で、そしたら——」

なんの取り柄も問題もないはずの俺が、いや、ないからこそなのか、俺には幼いころから悩み事があった。

「——もう、これだからああいう人は——って、ちょ、ちゃんと聞いているの優斗。聞いてますか？おい、ゆうとさーん。おい。」

友人は皆この悩みについて俺が話そうものなら、
くはてろゝだのく唐変木ゝだのくこのイケメンめが……リヤ獣は爆
発しろゝだのむちゃくちゃに言ってきやがる。

くそ、なんでだよ……俺はケメンなんぞじゃな
いっちゅゝに、そもそもイケメンというのはだな――

「ねゝてば!! 聞ってるの優斗!!」

ズイっ!

「つうを!! なんだよ、ちょ、近いつてびっくりするじゃな
いか。」

「ちょとゝさつきから話しかけてるのに、ずっとだんまりし
て……ちゃんと聞いてたの? それとも、そんなにも私と、しゃべる
のはいやだっというの!」

「いやいや、ちがうって!! ちゃんと聞いてたって、ほら、
あれだろ……えつと、その……そう! 委員長の田中が飼ってる
猫のジオルジュの話! いやゝほんとあのふてぶてしいデブ猫みて
たらなんか癒されるよなゝ。こないだなんて俺、あのデブ猫のおか
げで――って、あのゝ星羅さん。お目がお据わりになられてい
ますよ」

「……はあ、今、私が話していたのは昨日私に告白してきた

男の子の話！ 優斗が話してくれって言うてきたから話してるんだよ。ほんとうだったらあんな人のこと、思い出したくもないっていうのに」

「あゝそだった。そうだった、ゴメンって。それにしても星羅はほんつとモテるよな、今月で何回目だ？」

そう俺の悩みとは今、俺の目の前にいる美少女、
時任星羅ときとうせいりのことである。

いや、彼女がどうというわけではない。むしろ
彼女は完璧といっていいだろう。

流れるような黒髪は、肩のあたりまで伸ばされてお
り、雪原を思わせるようなその肌は白く透きとおっている。そ
して、黒真珠を思わせるかのような勝気な瞳は見ているだけで吸
込まれそうだ。

さらに、彼女の秀でているところは、容姿だけではなく、
い。テストをやらせればいつも満点をとり。スポーツをやらせれば
その素晴らしすぎる運動神経を隠すことはできようはずもなく。そ
して何より、極めつけは誰とでも平等に接する性格と太陽を思わせ
るような笑顔と明るさである。この性格のおかげか彼女のファンは
男子だけにとどまらず女子にもたくさんいる。

「むゝこっちは、迷惑しているだけなの。ファンクラブとか名乗る
意味わかんない集団解散させたばっかなのに……鬱だゝファンク

ラブは優斗のだけでいいっていうのに」

「はぁ？　なんでそこで俺の名前がでてくるんだよ。俺はお前のファンクラブなんぞに入っとらんでの」

では、問題とは？それは、彼女が幼馴染という理由だけで、俺とほぼ全ての行動を共にしていることである。美少女の幼馴染だとしてふざけんな。うらやましすぎるぞ！と大半のやつはうらやましがるだろう。

いや、俺だってこんな子が近くにいるだけならそりゃ嬉しいよ。……そう、だけなら。星羅の熱狂的なファン（ストーカー野郎）が星羅に振られたことなどで、何かにつけて俺に逆恨みをぶつけてこなければ。

「はぁ、ほんとと優斗は鈍感っていうか、にぶチンっていうか……私の気持ちにも気づかないし。」

さらに、悪質なストーカーとなると時々星羅にまで被害が及ぼうとすることがある。そして、その対処を俺が陰ながらしているせいということもあり、被害は甚大である。

今だって、俺はただ穩便に下校したいだけなのに隣の電気屋を曲がって商店街から路地に入った途端に何者かが襲ってこないかと、びくびくしている。こんな生活のせいかいつの間にか俺の足はかなり鍛えられた。……ええい、ちくしょう。どう見ても立派な大根足です。本当にありがとうございました！！

「ん？ゴメン、何て？聞こえなかった。」

「な、っなんでもないわよ」

「……そんな、怒鳴らなくてもいいだろうに。それよかファ
ンクラブ（ストーカー）には気をつけるよ最近の奴は過激だからな」

「それは、こっちのセリフよ」

「うえ、縁起でもねえ事いうなよ。俺は、昨日のあいっただけ
でもうおなか一杯というか、足がいっぱいっぴいだってのに」

「……昨日のあいっ？　って、そういえば昨日なんで先に帰
っちゃたの？　おかげで私、一人で帰らなくちゃならなかつ——」

『——次のニュースです。○×県の○×○市でまた、連続通
り魔事件がおきました。被害者は20代の女性で連日と同じく固執
に何度も刃物で刺された跡があり。今回の事件を含めると軽傷者は
二名重傷者は四名、死亡者にいたっては二名と異例の事態のなつて
おり、警察は対策本部を○市に移し捜査活動を——』

「また、通り魔？ て、言つかこれ私たちの住んでる地区じゃない！ こんな身近まで通り魔きてたんだ。なんか……怖いね。」

ふと足を止め、普段は見向きもしない電気屋の液晶テレビに俺も目を向ける。どうやら通り魔は何かオカルトチックな文字を犯行現場にいつも残しているようだ。かなり不気味だ。最近までいたい病気からいまだに抜け出せずそういったものに憧れを抱いていた俺でさえうすら寒く感じるほどなので星羅のそれは、普段のストーカーのせいもあいまって相当のものだろう。

「ふつ、大丈夫だよ、星羅だったら通り魔なんて拳ひとつでけちよんけちよんさ。そして、俺はそんな白馬の王子様にメロメロメロンってね」

「はあ、優斗そこは、嘘でも俺が守ってやる。とかそういったこと言つべきでしょ、メロメロメロンって……。なんか、色々と不安がってた私のほうがバカみたいじゃないまったく」

そう言うやいなや、星羅は先ほどのニュースのことなど忘れたかのように、また昨日のこの不満を俺にぶつけてきた。

日はもうほとんど落ちあたりは薄暗くなってきた。

罵倒を聞き流しているうちに、気づけば俺達は、商店街の喧騒を抜け自宅まで後数10メートルといったところまで来た。た。

目の前の青信号を渡りさえすれば我が家はもう目と鼻と先だ。ちなみに、星羅の家は俺の家のすぐ向かいである。

「ねえ、ちょっと優斗。」

「なんだよ、早く渡っちまわねーと信号変わるぞ」

現に信号の色はもう点滅を始めている。周りの人はもう渡り切っており残すは自分達二人だけであった。

「ねえ、あの人なんかおかしくない？ さっきからずっとこっちを睨んできてるんだけど。ほら、あの黒っぽいカツパ見たいのかぶってるひと」

「ん？ って、あれ隣のクラスの黒沢浮世くろさわうきよじゃね？ ほらいつもタット占いとかしてる変わり者って有名な女子。そんなことより、信号変わっちまったじゃねーかよ」

「そんなとつて……。いくら変わった子だからって普通あんなところ構わずに睨み付けてくる？それにあの子普段は大人しい子だよ——っえ、ちょー！沢村さん赤、赤、信号赤だつてば」

まだ少し離れているが、トラックがこっちにきていた。

さらに運が悪いことは、こういう時に限って重なるらしく。よく見れば運転手はうつらうつらとしている。

星羅の悲鳴じみた声と黒沢の突発的な信号無視が辺りを騒然とさせる。

「みいつけた」

なんなんだあいつ、あんなにずっとこっちを睨みつけていたのに、俺と目が合ったとたんニヤけ出しやがったぞ。

ぶつぶつと呟きながらニヤけ続けている黒沢は、おもむろに今までその黒フードのなかに隠すようにしていた右手を振り上げ星羅に飛び掛かった。

振り上げられたその右手を見れば、そこには刃渡り30センチはあるかというぐらいの深紅の狩猟用ナイフが握られていた。

異形の物のあまりの禍々しさに誰もが啞然としてしまう。

それは、星羅も例外ではなかった。

「あぶねえ」

「きゃっ」

ナイフが星羅を切り刻まんとしているすんでのところで、星羅を抱きかかえるようにその脅威から庇った俺は、腕に刺さったナイフをそのままに痛みをこらえながら黒沢の方へ向いた。

「つつ、ちくしょう、痛つてえなあおい。てめゝ黒沢いきなり切りかかってくとはどういう見だあおい」

「そつそんな、なんでそんな物を……。私はただ、優斗様に最後の供物を捧げようとしていただけなのに。なんです……」

黒沢は意味の分からないことを叫びだし、この世の終わりだと言わんばかりの形相で、その焦点が合わない目をさ迷わせながら、しかしその足取りはしっかりと、あとずさるように元来た道を逃げだした。

「おい、まて逃がすかよ」

ここで、俺が庇った時に浴びた血で震えている星羅のことを考えてやっていられれば、こんなことにはならなかったのだろう。星羅が襲われたということに激昂し我を忘れていた俺は、黒沢を無意識のうちに追いかけてしまっていた。

眩しいくらいのトラックのライトのなかで、最後に聞いたのは、つんざくような誰かの悲鳴じみた俺の名をよぶ声だった。

第二話 馬車の中で竜は眠る

目蓋まぶたが重い、視界が真っ暗だ。

俺は死んだのだろうか……不思議と痛みを感じなかったように思える。

いや……、あの勢いでトラックに当たっというて即死でないはずがないだろう。

じゃあ、一体今のこの俺は、なんだっていうんだろうか？

まさか、天国！？ いやはや、そういった類たぐいは一切信じていなかったんだが。

こんな、風にそれを否定されるとはな……。って、なんで俺はここが天国って決めつけているんだろうか。目蓋まぶたすらまだ開けていないって言うのに。

いや、俺だって逝くんなら天国の方がいいし別に好きで地獄に逝きたいとおもわんけどさ。いかんせん。まったく俺よ、どうしてそんなに考えが安易なんだよ。そもそも、あの時だ

つてもつとよく考えて行動していれば——はあ、やめよ、なんか寂しくなってくる。

それにしてもさつきから体中が重たい。と、いうかここかなり寝心地が悪い。背中が痛い。

……そろそろ、起きにやらんよな。いつまでもこのまま寝そべってるわけにもいかんだろうし、なんか、遠くから軍靴の音も聞こえてくるし。はあ。

できればこのままずっと寝そべっていたいんだが。体、だるいし。……もういっそ、このままずっと寝てようかな。いやいや、それならもつと寝心地の良いところで……ってまた俺は、現実逃避して。——ん、軍靴？

「よつと、……はあ、起きちまった。てか、案外簡単に起きられた。じゃなくて、ここ……どこだ？」

見ればそこは、天国というには余りにも殺風景で、また、地獄にしてはあまりにもおどろおどろしくはなかった。見えるのは、大自然。

目の前には、7、8メートル程の幅の道のようなものが15メートル程の高さの岩壁沿いにある。

岩壁と道はかなり長くどうやらここは、岩壁沿いに造られた街道のようだ。さらに背後にある鬱蒼うっそうと茂る木々が制する先の見えない暗い森や、見上げれば岩壁の端からも緑が見えることから、人里からはある程度離れたところであろうということがうかがえる。

いきなり自分が見知らぬ場所にいるだけでも俺のキャパシティーはパンク寸前だというのに、そこにはそれすらもどうでもよく思わせるような光景が広がっていた。

人、人、人、——50人程の人がそこにいた、いや、街道らしきところなのだから、人が多少多くいてもさして問題はないだろう。問題なのは、彼らの姿と目の前で繰り広げられている戦闘である。

そう、戦闘。彼らはなぜか戦っているのだ。

屈強そうな体躯の男たちがその身に甲冑をつけ40人がかりで馬車3台を取り囲むように守っているところを、耳の上や額に角を生やし、さらに数人だが羽や尻尾までも生やしている人々が襲いかかっている。

おいおい、何だよこれ！　なんであの人ら角とか羽とかナチュラルに生やしてんのよ。てか何、あの髪と肌の色。赤色でさえもありえねえっていうのに青とか緑とか。……初めて見たぞ、あんなの。

それに、あの甲冑と剣。本……物か。やべえ、何だあれ、何なんだよあれ！どこぞのRPGゲームですかここは！！

角を付けた人々は、少人数ながらも常人では計り知れないほどの素早さと自分の身の丈と同じくらいの大きさ程もある大鎧を振りまわし騎士らしき人たちを翻弄していた。しかし、それもやはり数にはかてなかったのか、6人程斬り殺したあたりで次第に取り囲まれ。気づけば一人、二人と順に斬り捨てられていき。ついにはたった1人となってしまった。

そして、その最後の1人も今、その顔に憤怒の形相をはりつけながら崩れ落ちるかのように倒れた。

被害状況は？

くそう、悪魔どもめ！おい、積み荷は大丈夫か。

はっ、積み荷には問題はありません。……しかし、
騎士^{ナイト}クラスの者を2人も喪ってしまいました。さらに神官^{メイジ}職の者が
重傷を負ってしまい。今日はもう進むのは無理かと、すぐにでも野
営地点を見つけませんと。

つつ、しかたあるまい。残りの騎士^{ナイト}クラスの
者を中心に3班に部隊を再編成する。くれぐれも、周囲の警備をお
こたるな。目撃者は、発見しだい即始末しろ。

やつべ、あいつらこっちにきやがった。どうしよ、
隠れるべきか！？あいつらの言葉何一つ理解できなかったけど、ど
う見てもヤバそうな雰囲気だし。何より目線がやべえ。

って、どこにかくれば！？　ここらへんで下手に
隠れてもすぐに見つかるだろうし。

ああ、ちくしょうどうすれば、と、とりあえずその
草むらにでも――

ガサガサ

あつ 「あつ」

「あ、あは、あははは、……は、ハロゝな、ナイス
ミートユー」

ニコ

………死ね

ニヤ

俺を見つけるなり男はそのロングソードを振りか
ざしてきた。

「ちよ。ちよちよ。タンマ、……タンマ!! ほら、
俺何も持ってないって。なっ、だからほら、そんな危ないもん早く
下せて。スマイル、スマイル――」

く空を切る。

しかし、俺の言葉は男のロングソードと共に空^{むな}し

たばりやがれ！！

ちっ、ちょこまかと悪魔が。素直に斬られてく

つぶね。」

「——スマイルって言ってんジャンよ。うを！あ

これは、やばい、マジでやばい。言葉通じねえよ。俺の全力のハッピースマイルセット丁重に返品されちゃったよ。どうしろってんだよ。

なんとか、紙一重で避け続けていた俺だが、それもさも当然のように長くは続かなかった。体には、避けきれなかった斬撃によるかすり傷がいくつもできていた。

さらに、騒ぎに気付いたのか残りの奴らもやってきており、俺は、もう逃げることもかなわない状況に陥っていた。

何だよこれ、死んだと思ったら。見知らぬ場所に倒れていてあげく、わけもわからん奴らに殺されるなんて。

くそ、くそ、くそ、くそ！　何か、何かないのか。

俺の思いとは裏腹に、目の前の現実は非常に無情で。囲まれた俺は、俺の命を刈り取らんとする男たちの持つ死神の鎌により蹂躪される。

じわじわと訪れる死の足音に対し、必死に抗おうと俺の体は、なおも希望を探し続ける。

頭が痛い。ひどい頭痛だ。

しだいに、出血のせいか意識が朦朧もろろとなり始めた。

た。

そしてこんな状況の中、俺はありえないものを見

神秘的に輝く空色の髪を腰辺りまで伸ばした10人が見ればその10人全てが魅了されるに違いないであろう、人形のような可愛らしさを持つ齡^{よわい}13、4くらいの少女が、その世にも珍しい髪と同じ色の瞳をこちらに、じっと向けていたのだ。

死の瀬戸際でありながら、俺はその天使のような

神秘的な美しさと機械じみた無機質な瞳に目を奪われていた。

はは、頭に血が回らないせいか、こんな妄想するなんて……。しかし、妄想であれ何であれこんなかわいい子に最後を看取られるとは、俺も随分出世したもんだぜ。

無意識に少女の方に手を伸ばしていた。まるで、長年探し求めていたものをやっと見つけたかのように。

すると、少女は俺の手を取り何かを確信したようなそぶりを見せ。すっと立ち上がった

マスター
所有者の存在の認証、完了。内蔵魔導高炉の始動
オルグリー
確認、完了。敵の位置補足、完了。最優先事項の確認、完了戦闘を開始します

キューインとタービンを回すような音と共に少女の姿が消えたかと思ったその瞬間、俺を取り囲んでいた男たちの体が一気に爆ぜた。

な、なんだ。どうしたいって何があった！？

先ほど全体を取り仕切っていたリーダーらしき男が、異変に気づいて声を荒げながら近づいてくる。

わ、わかりません。その悪魔を仕留めようとしたら、いきなり妙な女が——う、うあああああ

次々と、残りの男たちも爆ぜて死んでいく。

く、だれか本部に救援要請の伝令を伝えてこい！……おい聞こえてなかったのか！！大至急、救援の要請を——

必要ありません。チェックメイト 終了です

死屍累々とした中、少女がふわっとまた俺の前に突然現れた。そして、俺の胸にそっと手を置き。

S i e z u m i r I c h z u I h n e
n E i n V e r t r a g ! !

その鈴のような澄んだ声を高らかと上げた。

すると、不思議なことに二人を包むかのように辺りが黄金色の光で満ち溢れていく。

「マスターとの契約を確認。これから再生治療魔法を展開します。」

少女がまた呪文を唱えだすと。今度は二人の体が碧色に光りだし見る見るうちに俺の傷はゆっくりだが確実にふさがっていく。

しかし、俺の傷が治るにつれて、少女が時折だが苦しい顔をし始め。さらには、その体も下から徐々に薄く透明になっていく。

「え、えっと。大丈夫なのか？」

「はい、問題ありませんマスター。マスターの傷は責任を持ってこのアルス・X・マキナが、その全存在を使って治しますゆえ」

「ちょ、ちょっと待った。そういう意味じゃない、君のそれは大丈夫なのか、消えかかっているぞ。いやまて、落ち着け俺。さっきこの子は何て言った——そう、全存在を使ってマスターを治癒する！？どういう意味だ。今の君の状態と何か関係しているのか！？」

「ですから、私の存在を全て魔力に変換しマスターを私が消滅してもお治し——」
「今すぐ、これをやめるんだ！」

「しかし、それではマスターの治癒が」
「いい

から、早く。」

「了解、再生治癒を解除します。」

すると、俺たちから発せられていた緑色の光は消え失せ。そして、彼女の透明化は膝辺りでとまった。

「ふう、よかった……一時はどうなる事かと。おい、君もつと自分を大切にしろよ！！まあ、ともかく、アルス・X……マキナさんだっけ。助けてくれてありがとう。」

「いえ、マスター。私はマスターの僕として当然のことを、したまです。」

「そう、それだ、そのマスターってのは何なんだ。」

それにさっきのは？ 君は？ そもそもここはどこなんだ？」

「貴方様はこの世界の新たな我ら精霊の主たる精霊王様になるべく転生なさった存在。そして、私は魔導機構を司る魔工の精霊であり先ほどの契約により晴れて正式にマスターの僕へと加わった者でございます」

は、……。何、転生？ 精霊王？ 契約？ ナン
デス力それは。

その後、色々とアルスにこの世界のことを聞いた話をまとめると。

どうやら向こうの世界でテックソウルなるものゝたぶん黒沢が持っていた深紅の狩猟用ナイフのことだろう」を使った儀式により、俺はこっちの世界の精霊王へと転生させられたようだ。そして、なぜだか本人も知らないらしいのだが、生まれた時から精霊王にその存在全てを賭けて仕えよという使命をもったアルスが俺の転生をいち早く感じ取り。俺を迎えに行こうと来たところ、俺のことを人間が敵対している亜種人だと勘違いした奴らが俺を襲っていたのを発見したということらしい。

いや、バリバリ人間の姿しとるし……と嘆いていたらどうやら、この世界では黒髪黒眼というのは精霊にしる人間にしる亜種人にしるありえない色なんだそうだ。

「てか、まあもう、人間やめてるみたいだけど……」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもねえよ。それより、アルお前、俺は元の世界に戻ることはできないのか？」

「アル？ マスター、アルとは誰のことですか？
ここにはマスターと私しかいませんよ」

「お前だよ、お前。アルス・X・マキナなんていちいち長ったらしくて呼びづらいんだよ。だから、親睦を深めるって意味も込めてアル」

「アル……アル、いいですねアル！私、とても

気に入りました。こんな気持ち初めてです。この名前、大切にしますね！」

そういうと、アルは少し顔を赤らめ何度もマスターがくれた名前、マスターがくれた名前と呟いている。

「気に入ってくれたのはいいんだが、アル、お前顔赤いぞ。まださっきの存在消滅の後遺症があるんじゃないのか？ あんま、無理すんなよ？」

いまだ一人で呟いているアルの顔を覗き込む。

「はひィ、だ、大丈夫ですなんでもありません」

「お。おう。そうか。ってそうだ。さっきも聞いたんだが俺は元の世界に戻ることはできないのか？」

「それは、……私にはわかりません。マスタ
ーは元の世界に戻りたいんですか？」

「いや、んゝまあぶっちゃけ。長年夢見てい
たファンタジー世界にこれてかなり嬉しいよ、しかもいきなり精霊
王なんという胸高鳴るジョブになってるし。さっきは、かなり危なか
ったけど。これからここで暮らしていくのも悪くないなおもつて
るんだ」

「でしたら——」

「でも、俺さ、向こうの世界でやり残したこ
とがひとつだけあるんだ。それがちよつと心残りなんだよ」

「そう……なんですか」

話しながらさっきの男達からの戦利品をち
やっかりと入手するべく作業をしていると、残すは男達が必死に守
っていた馬車だけとなった。

1台目と2台目の馬車のなかには寝袋や食
糧といった冒険するための道具がそろっており、かなり良い収穫で
あった。

しかし、問題は3台目で起きてしまった。

そのなかにあつたものは、なんと檻の中で眠っている少女であつた。しかも、ただの少女ではなかつた。少女の整つた顔立ちや、その白髪の中まで伸ばされたふわふわとした髪に掛けられた薄汚れたフードによって隠されているかのようにそこには角があつた。

少女の耳の上には羊の角のような少し湾曲した立派な角があつたのである。

「……………」

「どうかいたしましたか、マスター？ ……女の子のようですね。マスターどうしますか？ その子」

「どうするも何も、こんなところに1人置いていくわけにもいかないだろ。夜になったら何がでるかわからんし」

「ですが、マスター連れて行ったところでこの子にとつての安全はさほど変わりませんよ?」

「え? なんです。こっちにはアルがいるし。それに、もしものときは、俺も微力ながらもこの子を守るからここに置いてくよかよっぱど安全じゃね?」

「すみません。マスター先ほどお伝えし忘れていたのですが私、先ほどのような力はもう発揮できません。存在を魔力に変換した際に精霊としてのランクが降格した上に契約したばかりなので魔力制御ができない状態なのです。さらに私、最近生まれただけなものでそもそのステータスが安定しておりません」

「うそ」「ホントです」

「いやいや、だからって置いていくわけにはいかな
いよ」

「わかりました。では、私もできる限りのサポートを尽くさせていただきます」

「うん、よろしくたのむよ」

少女を担ぎ。取りあえずは、どこか人がいそうな所を目指そうと、これからの方針を決め、準備を整えた俺たちは、赤くなり始めた夕空を背に街道を進むのであった。

はあ、星羅いまごろどうしてるだろ。何事もなければいいんだけど――

の
だ
っ
た。
。

こ
う
し
て、
俺
の
異
世
界
転
生
の
一
日
目
は
幕
を
閉
じ
る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9624x/>

トランスマイクリエーション

2011年11月4日03時09分発行